



誹諧

卷之首

物見車

序
自註

手帳

特別
~5
6053
1



15
6053
1



56-4133

貴子代も松風抄と云うもその如くは
し和らうと十二律と云うぬとやそれと
ゆ分の人の身よき物ゆつこ目出度大
し多ううんとうや甲し統の奇よい六
義十辨とて多しぬ安さしを能讀も其
校本のこもうとのしうも品のたうも
しと借うんとしうよし故人の書もまじ
しとう統の連歌をじうしぬ必原分新
しぬしぬ定めをわししと也能讀則と

中よりとう風情と能家とつとしく大うひの
うらふとやあしう統の今時都鄙し能讀
を弄すししぬし盛し又其中ぬ句を
善悪と云う人多くししぬしぬしぬ
しうとうしてし見各別なうししぬし
ぬし天泉鬼夜水とどりよしぬしぬし初
学い其田と云うしぬしぬし一途しとの
うたより其の原をわあしぬしぬしぬしぬ
互に口傳はのつしぬし持扇ぬしぬしぬし

あまの打あしをさかすもみちりしとわらふ
いふあしをさかす此明晴をさかすもみちりしとわらふ
やうくし作しとてさかすしとてさかすもみちりしとわらふ
し能信の教白くさかすしとてさかすもみちりしとわらふ
権よさかすもみちりしとてさかすもみちりしとわらふ
立文字の川さかすしとてさかすもみちりしとわらふ
とてさかすもみちりしとてさかすもみちりしとわらふ
のゆりしとてさかすもみちりしとてさかすもみちりしとわらふ
雨膳脂濕とてさかすもみちりしとてさかすもみちりしとわらふ

り東坡山谷女遊佛印等り潤老嫩落し補
いし事いどりしとてさかすもみちりしとわらふ
名とてさかすもみちりしとてさかすもみちりしとわらふ

未入世や権りり黄白くさかすもみちりしとわらふ
借いりりあさくさかすもみちりしとわらふ
町をくれりりさかすもみちりしとわらふ
蝕の白くさかすもみちりしとわらふ
當分をさかすもみちりしとわらふ
権りりさかすもみちりしとわらふ

似私
常牧
孤黒
晚山
如泉
言泉

毛吹とやうきつらうよとらる程まふやうし中らうらう
 卿しとあとののま名をとらとよとよしす
 といふ事とてさうまふさうしと社をい一卷こ
 だとも卿の家近うらわちと日比惑つら推
 敲ととてさうものうしとらあんととれを
 批園よ雲泥のお遠まをたつようしく再吟
 しととををばらうらうらよ海士よ本進
 せ松よあびらうあさうらうととと是岳者
 えとらあえぬ所わら故初名の田うしとか

ともせとて今うらぬじとてみ源と本の
 ぬまうとてわとてあさうしと道す
 とてあはすまうしと社をい
 や作い一卷けうはとあさうしと頭
 ずうと物見車と影号して我外と
 ぬまうとてわとてあさうしと道す
 元狼藉人のとてあはとてあさうしと
 見とてあはとてあわとてあさうしと
 く書はとてあはとてあさうしと明老の案

下ノ投ト維時元禄三庚午ハ少々中秋盡
維澁橋頭隱士歩雲子叙



歌仙之雜諧

自註

三月月乃わつとを料を紙書

夕陽よびの三日の月孤書わくは
少らあつとわわふの季を月のさ
次第に濃なるして真をうつくは
なよ月の料も作は侍

花乃辰つとを及と葉は花

花のりくを及と都の季とたは
よせも葉葉の花はいふと満
ゆきと御の御はわつとを
五書とわはははははははは

杖よは竹の根をききあして

杖よ切^ニかきあして竹の根むくあつ

句まゝ

東の人の花のうらみとわが世まはる

竹をそのまゝにたれたのうらみとわが

怪振と鷹は人のととあひ

影のむく竹杖あかり

雨やうらみちやしらまはあつ

わがうらみ向したつひのおこり

おこりうらみとらまはるまはる

とびつらえ根をほほなるい取

とびつらえひいし作つと出とは城^{ミヤコ}は

おがはる素門出入きくあつ

ほろりとほほ振回舎の中あも国よ

えとれまひほほく梨白のほとを

付煩むしてんは

草の舞臺の衣装備ね

一じつよのうらみそ先の信しわらま

後法とほあもほほあつし朝暮と

とほほ家なほほあつし朝暮と

魚音の舞臺

恨の舞臺

待後一糸のいし目とむらぐ航

左来ヨリかく付合スヤかたきしとも
むらぐらぐらのいし目とむらぐら
ちく付燭ひて如鉄

脅けり屋敷の枕まろく坊

祥子月のおろしやなわく
まろくろくくし隠り目を御案
もむらぐらぐらとむらぐら
あむの脅に抱きかかへせな
付はまてしやむ

婦のいし目鏡をちのいし目の

帯の附はあはきく不及註

踊くは終てまろくじふらよ

きかすよのし繁あし
幻が娘とむらぐらとむらぐら
踊を帯の附物ちのいし目の
假あしあむのいし目
とむらぐらむらぐら
婦の向ともは月夜のいし目
むらぐらのまてまろくじふら

標本てもあはむらぐら町遠

西隣はあはむらぐら
むらぐらとむらぐら
むらぐらとむらぐら

妙賢出とく月のさやきた

あむ註成りて附合と

時言かむのこころとて

親の目よ下まのれりるいと丸

至夜のワラリも好くかくまて

家ま家業のふかげが親の目

かはわり親のやし子のたもひると

附れきて壯年と云りんふた梨

とくふとてしこころ廻り

武士まにのいとふとがひらせ

そ梨一むそ唯我物のらるるを

青才まきりのばまのるわき

わき後はあやしよむとあうしく

るの海より水危きてまみすよ

付ケ信

ね智乃猿薮の味淡とを梨

るの海よりとつふあむちれその味

と目ひ一むは俺と下んよとらして

付くるは猿薮の上よりとらふは建

は眼つらつとれじ家柄

赤めよりして家柄つらつ附合

そちらひひととはんまの提たを

あむま目かの柄はわくら

旅行の難さの事
余等とてこの事と
もふらふらと附き

新紙くきて為る子持場

自由意の註とて
おろしの新味は

去由の思へ浦を射うは

浪もくは後年とてその
浦くは里とぬれ細引木領内と
越して望網はく去由は
射は新紙くの根と

私借と者よん事也る外

亦ゆらわりの秋を去る
夫借る物の海もよとく
事とはつと海は射の事
様人の想ひ海とらなる
下らち海は射とらと
はとと

一ツ宛教の稿と各は

法よ又法法樂の歌

初といふは所亦ゆの字
打紙の事外よ初の稿も
てと付きまこの南白

いほりく入はらく...
打紙紙色...
附類ひて唯句とち...
まは平ら茶

身家氣まて女々怪一練の内

向書きて唯練かよ夜更て
信ふ女々怪一とちよふらと付奇
と不皮註句の面にわらうなるを

志程とらてし榮 得定

原氏お後のふと月ひてある
の女と美ありて付まを案下の
とり一まの信あてるおこらぬの

は舟かしき又も響よるるこ

ゆ中らおしきて池ののほきれ

信じほくまの方揚ッ競 並

右三句自註よまよとほむし...
おこし具打紙と書出...
まはの信あて...
か

糸と煮て煮るら松乃上菴

ゆ押めまやし競るの物ん涼...
よらののひまのた竜よあ...
作伝

山伏乃老の、きつかりつり月

南の海及北の海より北の海
人海より入るべきは海へのいふは
かゝりて海より入るべきは海へ
是より後ひ者の事よりいふは
い海は海へのいふは海へのいふは
かゝりて海より入るべきは海へ
おのる物海へいふは海へのいふは
おのる物海へいふは海へのいふは
おのる物海へいふは海へのいふは

おのる物海へいふは海へのいふは

おのる物海へいふは海へのいふは
おのる物海へいふは海へのいふは
おのる物海へいふは海へのいふは

飛路をねの極かこつて海へいふは

おのる物海へいふは海へのいふは
おのる物海へいふは海へのいふは
おのる物海へいふは海へのいふは

おのる物海へいふは海へのいふは

おのる物海へいふは海へのいふは
おのる物海へいふは海へのいふは
おのる物海へいふは海へのいふは

死のあはれをたはむるはむらさき

常連さうば女の一世の別秋
今の晴とあはれは中あやそ
とほくのあはれはあはれい合さう
まゆまゆりしあはれはあはれ
あはれまはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ

舟のあはれはあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ

花はあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ

くろくどわらじ様の麒麟

元亨
百三十九巻ノ下ノ様ト附ク

雲の巻切を懐テユモリ

武江の桃青今ハ雲はの色ニ任ス世々
細潜を批判セシヤん浪花の轍士
壬生れ和及ハ予ヲ知故ナレハイハ
はくま一折姉トモ阿ハハハハハハ
ああ多なるまうあひなと一ハハハ
今ハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハ

